

ひので映画大使最新版

第23回映画大使「RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ」

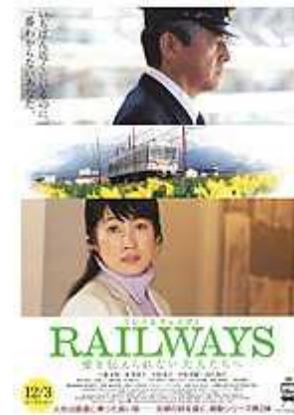
期 日 平成23年12月3日(土)

場 所 ワーナー・マイカル・シネマズ日の出

【ストーリー紹介】

仕事一筋で生きてきた鉄道運転士の滝島徹(三浦友和)は、間もなく定年退職を迎えようとしていた。退職後は妻と過ごす人生を望んでいた徹だが、妻の佐和子(余貴美子)は夫の退職を機に、辞めた看護師の仕事を再開しようと考えていた。そんな妻の気持ちを理解出来ない徹と口論になった末、佐和子は家を出てしまう。

大切な人と'これからの人生'を生きていきたい。本当の気持ちを伝えることの素晴らしさを伝える感動作！



(C)2011「RAILWAYS2」製作委員会

映画大使の「感動と感想」をお伝えします。

このコーナーは、映画を見た感想や感動を、ストーリーは伏せて「みなさん」に紹介するコーナーです。



今回、参加された映画大使の皆さんです！

▶ 映画大使の「第一声！」

本作の脚本は日の出町在住のブラジリィー・アン・山田さんです！

立山連峰と富山の美しい田園風景に感動！

三浦友和さん、余貴美子さんの夫婦の演技が素晴らしかった！

▶ 映画大使の「映画のツボ！」

Aさん

私も60歳で退職していますが、主人公と自分がだぶって見えました。前回と同じタイトルで映画を作るとなると、前回は上回るような作品でないといけないというのがありますが、今作は良かったと思います。

Bさん

風景と音楽がマッチしていて、心が洗われる感じがしました。ラストは泣けました。

Cさん

立山連峰の美しい風景と、電車ののどかな描写が合っていて、心が安らぎました。男の人というのは一生懸命仕事をしていて、奥さんもそれを全部理解してくれているんだと思っていても、やっぱりお互いになんとか分かり合えてない部分があったり、定年後は奥さんと旅行でも行こうという気持ちがあっても、奥さんは落ち着いたら自分のやりたいことがしたいと言ったり、お互いの想いが伝わらないのはつらいですね。

「男は定年してからが長い」というセリフは本当にそう思います。子供達が巣立ち、年月がすぎて2人きりになると本当に時

間の間隔が全く違ってくると思います。これから先の時間の方が長いというのが印象的でしたね。でも自分の行きたい道を進んでいくという結末、そしてハッピーエンドになってよかったと思いました。

Dさん

私達の世代より少し先輩の夫婦のやりとりを見ていて、自分と重ね合わせて考えられたのがとてもよかったです。思い描いていたラストシーンで嬉しかったですし、メモしておきたくなるようなセリフもいくつかありました。映画って景色がいいと一層よくなりますね。

Eさん

前作では主人公と年齢が近かったので共感できる部分がありましたが、今作は主人公と世代が違うので、その部分でどうかと思っていましたが、観ている内に前作を凌ぐくらい、どっぷりと映画の世界感につかっていました。大変感動しました。

この作品は定年を迎えた人の物語です。私も母の介護を長くしてきました。状況は違いますが、続けてきていた事が終わると、様々な迷いや不安が生じます。でもそういった中でも改めて気づくのが、'そういう人がいてくれたから頑張れた'という想いです。そういった部分でとても共感できました。主人公のセリフの中で'自分は一つの事しかやってこなかったから、それでは駄目なんだよな'というセリフがありましたが、男は一つの事しかできなくなりがちなので、周りにもっと目を配っていかないといけないんだなと感じました。

Fさん

前は再出発の話で、今回はリタイアしていく人の話ですが、夫婦それぞれの人生が投影されていましたね。映画を象徴する存在として、西武線で活躍し、引退してからは余生を地方鉄道で送って(走って)いる'レッドアロー'という車両がありました。退職後も運転士として会社に残るという選択をするのかという所で、主人公とレッドアローが重なって見えました。ロケーションがとてもよく、私も行ってみたいくなりました。

Gさん

私も少しプライドが高い部分がありますが、この作品を観て、相手を受け入れ、相手の言う事を聞いて、そして言葉で返す。そういう事が大事なんだと考えさせられました。感謝は言葉で伝えないと分からない。当たり前になってしまいます。'感謝'の反対の言葉は'当たり前'だと思います。分かってくれるのが当たり前、いるのが当たり前ではなく、伝えないと分からないんだという事がよく分かりました。自分と重ね合わせる部分が多かったです。私も旅が好きなので、行ってみたいと思いました。

Hさん

夫婦の関係がよくないまま物語が進んでいく中で、映画を観ている方にあまり不安がないのは何でだろう?と聞いていたのですが、風景描写がすごくよかったので、そういう場面が、この2人は大丈夫なんだって思えるような安心感を与えてくれていたような気がしました。

また、お互いの仕事を見るシーンでは夫婦愛を感じました。二手に分かれた線路が映っているカットがラストなどで出てきましたが、人生が進んでいく上では色々な分かれ道があるんだよってという事が伝わってきました。人生これからだと思わせてくれる映画で、いろんな世代の人が楽しめる作品だと思いました。

📌 作品の内容 (印象に残ったシーンなど)

- ・伏線がよく活かされていましたね。
- ・思いもしないような展開と、それを上手く收拾させたストーリーが見事でした。
- ・脇役もそれぞれの個性が十分に出ていましたね。役者もよかったです。
- ・様々な人間ドラマがあって見応えがありました。
- ・この作品のクランクインは東日本大震災の翌日からだと聞きました。スタッフ、キャストにも様々な思いがあった事でしょう。再生というテーマで合っていたと思います。
- ・若い世代にも是非見て欲しいですね。
- ・松任谷由実さんの歌う主題歌もとてもよかったです。
- ・3部作という話を聞いたので、次回も楽しみです。

📌 まとめ

本作品では、第2の人生をどう生きるのか、誰と生きるのかというテーマがありました。人生は人それぞれ違います。様々なレールに乗り換えては、寄り道したり、一旦停車してみたり、また動き出したり。そうしながら終点を目指す長い旅です。旅の途中で大切な人と出会う事によって、また違うレールが見えたりもするのでしょうか。かけがえのない人の存在に気付き、その絆を大切にしながら生きていく事が、人生をより豊かにする分岐点になるんだなと、この作品を観て感じました。皆さんも是非ご覧ください!!

本作で脚本を担当された、ブラジリー・アン・山田さんは、日の出町に在住の方です。今回、映画大使を開催するにあたり、大使及び日の出町の皆様にメッセージをいただきましたので、ご紹介いたします。

▶ ブラジリー・アン・山田さんからのメッセージ

今回の登場人物は『定年を間近に控えた夫婦』です。夫には夫の言い分があり、妻には妻の言い分があります。長年連れ添った夫と妻。それ故に離ればなれになってしまったお互いの気持ち。どうすれば、ふたりは通じ合うことができるのか？脚本を書き進めて、何度も壁にぶつかりながら、こたえ(答え)を探しました。立山連峰をはじめとする富山の雄大な風景とっしょに、皆さんも『愛を伝えたい人』とっしょに答探しをしてください。

ブラジリー・アン・山田

▶ 関連ページ: [これまでのひので映画大使](#)

▶ 関連ページ: [ひので映画大使のトップに戻る](#)

問合わせ先: **教育委員会文化スポーツ課社会教育係**
電話042-597-0511(内線544)

◀ [前のページへ戻る](#) | [ページトップへ](#) ▶

〒190-0192 東京都西多摩郡日の出町平井2780番地 電話 042-597-0511(代表)
Copyright © 2011 Hinode Town All Rights Reserved.

[サイトマップ](#) | [このサイトについて](#)